松々レンジャーズ

僕は、大雅、一応、生徒会長。明日は、中学校の卒業式だ。3年間の思い出いっぱいあるなあ・・・。中身の濃いのは、部活と生徒会かな。特に、生徒会は達成感がある。自分たちが始めたボランティア、地域の方と世代を超えて繋がった。そして、「絆」「つなげる」が、僕たち生徒会の活動テーマになった。

根上五十三次、根上中学校の総合的な学習のテーマだ。根上の町の自然や歴史、産業について探究的な学習をするんだ。五月のある日、僕たちにとって印象深い出会いがあった。五十三次のひとつ、源平の古戦場、根上山にある「根上の松」。そこで、僕たちは二人のご老人（失礼）に出会った。一生懸命、松林の雑草とりや松葉かきをしていた。根上の松を見学している僕たちを見つけて、声をかけてきた。

「今、松林がピンチなんや。」

北村さんと山本さんの唐突な話に僕たちは、驚きとそれでいて、何かしら興味がわいた。北村さんは高坂・根上緑を守る会の会長さんで、山本さんは根上森林連合会の事務局長さんだった。

「だって、根上の松も立派だし、まわりに松も生えているよ。」

「昔はなあ、昼でも暗いくらいに松が茂っていたんだ。この松は、根上の人たちの生活や田畑を守る防風林や防砂林の役割を果たしていたんだ。緑が多いと空気も美味いし、松林には、松露も生えていたしなあ。」

北村さんは、昔の風景を懐かしむかのように話し出した。

「何で松が、減ってしまったんですか。」

僕たちは、不思議に思って質問した。

「マツクイムシだよ。」

お二人は、怒るような強い口調で言い放った。

「マツクイムシって、何ですか。トゲトゲの松を食べる虫がいるんですか。」

「マツノマダラカミキリが、マツノザイセンチュウを運び、そのセンチュウが松の若葉から幹に入り込んで繁殖し、松を赤く枯らしてしまうんだ。困ったことに、伝染して次々に枯らして、ご覧の通りだよ。」

僕たちにとっては、そんな虫がいるなんて初めて聞いた事だった。

「このままほっておいたら、根上の松も枯れてしまうんではないですか。どうやってマツクイムシを防ぐんですか。」

何かとても不安になって質問した。

「松の幹に薬剤を注射したり、復活できない松は、かわいそうだが切り倒すしかないんだ。」北村さんと山本さんは、残念でならない表情だったが、気持ちを切り替えるように真剣に話し始めた。

北村さんが、
「せっかく先人が何百年もかかって作った松林が、消えてしまう。何とかせんと」
山本さんが受け継いで、
「自分たちが子供のときのように、松林を復活させるんだよ。松を植えるんだ。」
二人は、僕たちをしっかりと見つめながら、
「力を貸してくれんか。今、地域の人たちに協力してもらって、伐採した松をチップにしたり、雑草や低木を刈り取ったりして荒れた土地に松の若木を植える準備をしているんだ。」
「人手が足りないんだ。若い力を貸してくれないか。」
「は、はい。学校に帰って相談してみます。」
急な申し出にはっきりと答えることができなかったし、お二人の真剣さがあまり理解できなかった。

学校に帰って、生徒会で考えてみた。
「毎年、海岸清掃のボランティアはやってるけど、松林の復活まで手伝うのは、大変じゃないか。」
「そうよ、松を植えても、すぐに成果は出ないし、世話するの辛そうだよ。」
泰成も桃子も乗り気じゃなかった。
「けど、北村さんたちの話は、何か引っかかるんだ。このままだと、松林がなくなるんだろう。」
みんな、黙り込んでしまった。
「もっと詳しく話を聞いて、僕たちにできることから、小さなことでいいから、やってみないか。」

学校から、北村さんや山本さんに連絡をとってもらって、具体的な行動を起こすことになった。まず、今、北村さんたちがやっている植林地の整備作業に参加することになった。夏休みに入ったばかりの七月、僕たちは、根上山に集合した。ボランティアの呼びかけに、二十六人の生徒が集まってくれた。内心僕は、
（参加者少ないなあ、やっぱりなあ、こんな暑い日に来てくれないよなあ。）
炎天下の雑草取りや松葉かき、散策道のチップ引きは、汗だくになる辛い作業だった。人数が少なくて、長時間の作業は、疲労感が残った。高齢の北村さんたちの一生懸命さを見てると、お金ももらえない辛い作業に、どうして、こんなに打ち込めるのか。不思議に思えてきた。
「松の植林は、冬にするんだ。それまでに、松の若木を植えられる状態にしないとな。辛い地道な仕事だけど、とても大切な準備なんだ。みんな、今日はありがとう。」
北村さんの問いかけに

「今度は、もっといっぱい連れてきます。」
と、思わず答えてしまっていた。

全校集会で参加を呼びかけたり、森林連合会の人たちに学校へ来てもらいマツクイムシの怖さや松の特性など、いろんなことを教わりながら、取り組みの輪がゆっくりだけど大きくなっていった。まだ十分に、活動もしていないのに僕たち生徒会は、この取り組みを、森林保護警備隊だと称して、『松々レンジャーズ』と命名した。

十二月十八日、ついに、松を植える時がきた。千本の黒松の苗木を植えるんだ。日本海からの北風の強い中、二百人も集まってくれた。地域の方々や緑の少年団も加わり総勢三百人だ。僕たちは、なんか、嬉しくて、温かな気持ちになった。みんな笑顔で、北村さんの話を聞いていた、

「バスケットボールが入るくらいの穴を掘り、そこに炭を敷き、若木の根を広げて植え込む、また、炭を足して、砂をかける。」

僕たちは、北村さんの指示を受け、一斉に歓声と共に、植え始めた。

「炭をしくことで、松露菌が繁殖し、水をやらなくても済むんだ。夏の炎天下でも大丈夫なんだぞ。そして、数年後には、松も大きくなるし、美味しい松露が取れるんだ。」

北村さんと山本さんは、植え方の指導や松露の話をしながら、とてもうれしそうだった。

「始まったばかりだ。頼んだよ。」

「じいちゃんたちは、この松が、大きくなっても、松林になるのを見ることが出きんげんなあ。」

僕は、ハッとした。成木になるのに八十年はかかる。僕だって見られないかも・・・・。

「みんなとこうやって松の世話をしてるのが楽しくてなあ。」

北村さんは、百年後の風景を眺めるような眼差しを空に向けた。

根上中学校が、高坂・根上緑を守る会と森林連合会のご指導を受けて、平成二十二年から始めたこの取組は、地域やＰＴＡも巻き込んで「いしかわ能美の松原再生プロジェクト」へと発展してきている。

植えた松の若木の添え木に、郷土の九谷焼で作ったネームプレートを取り付けたり、美術部員と生徒有志が植林地の横を通る北陸自動車道の消音壁に根上海岸の「ふるさと壁画」を描いたりと松の落ち葉かきに加えて様々な取り組みがなされている。

地域の産業や様々な方々や機関と連携した、ユネスコの提唱する「持続発展教育（ＥＳＤ）」へと広がりを見せている。

世代を超えて繋がるプロジェクト。

百年後の根上の松原は、・・想像すると楽しみです。